

## アマチャア登山家の今日的意義およびその志向性

—ある遭難に「こゝよせて」—

近藤 節夫

あれは、昨年の夏ごろからだったと思う。谷川岳の連続的な遭難事件に端を発し、「登山にも何らかの規制をする必要があるのではないか」と、マスコミがはやしたて、世論をわかせた。そして、十二月千葉県のR山岳会の警告無視による冬山遭難事件は、これに火に油を注いだ形となった。だが、このR山岳会遭難事件は、もう登山家としてというより、むしろ社会人としてのあり方の問題につながる。パーティ全員が、共同社会の一員として著しく適格性を欠くうえに、知性と主体性をも持ち合わせていなかったことにある。

一例を挙げよう。私は、この山岳会の代表と称する人たちが、登山計画の変更を求める世論の中を、テレビで自分たちの剣岳入山のスケジュールと計画について説明する姿を観た。その席上、彼らは同席した神田坤六・群馬県知事に対して、「我々の行動は、我々自身の責任と権限によって行うものであり、誰からも指図をうける筋合いのものでない。万が一遭難が起きたとしても迷惑なら放っておいてもらいたい」と不遜にも「こういふ主旨のことを述べた。事実、彼等自身の行動は、間違いなく彼ら自身の責任と権限に基づくものである。だが、道理のあるのはそれだけである。遭難事故発生の際の救助云々に至っては、思い上がりも甚だしい。結果において、彼ら自身、誠心誠意寝食を忘れて救助にあたる人たちを冒瀆することになった。

「自分の遺体だから放っておいてくれ」という論理は、善意に解釈するなら経済性を考えたとも受取れるが、共同社会における責任という肝心のところをすっぽり見落している。これは、自己を他人から疎外するということであって、逆に他人を疎外するというロジックに発展しかねない。つまり「他人の遺体だつたら放っておく」ことになる。これはもう、共同社会の成立基盤を根本からぶちこわすものである。もっと重要なことは、私は彼らのこうした考えの裏面に、世をすねた世捨て人のニヒリズムの裏返しとして、自己を意識的に他から隔絶し、自分たちの城の中だけで事を運ぼうとする山男の、妙に思い上った一面を見るのだ。

救助された全員のその後の言動もおよそ常識を欠いたというが、それは差し措くとして、彼らの知性のなさ、主体性のなさは、彼ら自身取材にきたマスコミに心ならずも暴露した。

「この山行計画全体について知っていたのはリーダー（死亡）。ヒマラヤ遠征の経験ありだけで、すべてリーダーを信頼した」小学生が先生を信頼するのとどこか似ている。従って、リーダー以外は、計画の一端を知っていたに過ぎないし、一の谷へは入らないと思っていたという。実際には一の谷へ入山し、美事に犬死にした。彼らは、一人ひとり社会人としての常識と心構えが欠けていたうえに、パーティとしても一人前の

行動をとることが出来なかった。

「この全体計画を果して知らなかったかどうか、彼らのこれまでの言行不一致から推しても、全面的に信用することは出来ないが、もし知っていたとすれば、一の谷入山の為に、心ある人たちを愚弄したことになるし、知らなかったとすれば、いざ一の谷入山の時、誰か一人ぐらい何故リーダーに敢然と反論しなかったのか。それにしてもあまりに未成熟な彼らの言動にはただあきれればかりだ。

そしてこの一件は、派生的に、だが極めて重要な問題を提起する。死人に鞭打つ気はさらさらないが、こういう小児病患者を選びすぎた(??)パーティが、幸いにして遭難せず、冬季処女ルートの登はんに成功したとしたらどうなるか。この場合、彼らの成功という栄誉を、果して祝福すべきだろうか。堀江謙一青年の密出国による太平洋横断と、発想は似ているが、いささか事情を異にする。本件に限っていえば私は、無法(あえて「こつ呼ぶ」を許してはならないと思う)。

私の論理は、一方的に無法を認めないというのではなく、合理的に解釈して、彼らが社会人として無資格者であり、その彼らが掟を破ったという二重の罰がひとつの栄誉をもってしてもカバーし得ないという理由に基づく。ともすると大事の前の小事として、大失点を栄光のオブラートで包み隠し去るきらいがある。なしくず的に反省と自戒を求める声が影をひそめ、代って賞讃の声が拾頭する。私は、こういう一連のプロセスと風潮を素直に、だが心から憂うる。

近年、若者の冒険心の喪失を嘆く声が多

い。アドベンチュラス・スピリットの気風が希薄になってきたのは事実である。そして一部には、若者の行動に対する一連の規制がこれに与かったとの声も耳にする。だが、私は、それらの論旨の中に、彼等が共同社会の一員としての適格性があつたかどうか、という本質的に肝心のところを見落している点で、全面的に賛同出来ない。

基本的に、彼等が共同社会の一員として失格だったということが、この際致命的なのだ。「塔」9号でも一寸触れたが、我々近代人は、好むと好まざるとに拘わらず、共同社会の一員として社会的責任を有している。だとすると、我々の登山活動に於いても、社会との絆は、完全に無視することは出来ない。悠久今日まで、登山は社会の進展と共に歩んできたのだ。従って、高度に発展した今日の社会における登山というもの、そして我々社会人の登山活動自体が、この社会において、どう位置づけられているのかという問題を今一度考えてみる必要があると思う。

今日登山が世間の注目を呼ぶ要素は、困難なルートの(初)登頂、忌むしい遭難、そしてただ単に多くの人が山に登るという山に対する熱病的人気、大雑把にいつてこの三点である。せつかなちな当世の見方は、登山に対しても例外ではなく、その結果において、これを判定する傾向が多分にある。それ故に立案・計画・行動のあとにくる結果が、不幸にして凶となって表われた時、その過程における貴重な努力や、トレーニングは、性急に無価値だったと看做される危険性がある。その結果が、過程における努力を、成功の可否に拘わらず、これこそ尊いもののだが、「この努力を軽視して」結

果』に賭けることになる。登山の基本である前段階を無視した『結果』を諸けた争いが、漸次激しい過当競争を展開する。その結果はどうなるか。ここにわざわざ取り上げるまでもない。これは共同社会にうつせきした悪弊が、登山を蝕んだ一例だ。

ありきたりだが、我々は現段階の共同社会を過大にも、過少にも評価することなく、「あるべき姿」を踏まえたうえで、登山活動にアプローチしなければならぬ。共同社会の免疫のないクライマーは、『結果』に注目を集める登山方式をさけるべきだ。はっきり言って「登頂だけが目的の登山なら止めなさい」ということだ。高度な社会、純真な心をも毒しやすい社会、ここでは、これに毒されない、社会に対して適用性のあるクライマーのみが、登頂を賭けて山に登る資格を有することが出来る。このことは、登山者の質をかなり精選する。そしてその絶対数をも制約する。しかしながら、日進月歩の社会に相對して、それに対処する我々登山者が、主体的に、特にその精神面において進歩しないとすれば、登山用具の発達（技術ではない）によって、困難な登はんがたやすくなり、やみくもに岩壁に取り付きたがる輩の多い昨今、我々登山者と山との間の亀裂を一層広げるだけなのだ。

卒直に言って、私の論旨は「うだ。共同社会の一員たる資格を有する者を、その前提とすることはいうまでもないが、大別して登山には二通りある。栄光の『結果』を追求するタイプ（勿論その過程における努力は無視しない）と、『結果』よりもその過程を重視するタイプとに区別出来る。

前者は積極的に自己の技術を研鑽しながら、同時に、自分なりに目標の山に対し、

真摯に謙虚に研究を重ね、且つ荒波渦巻くこの社会の潮流の中で自己を見失わない沈着さを持つエキスパートをさす。後者は登山の究極の目的である登頂を目指すことは当然であるが、これは広義に解釈して良い。登頂を目指すそのプロセスにおいて積極的な目標をもつことである。それは、登山という労働力を駆使する作業の中で、自己を鍛練するということであつても良いし、高山植物を研究するということであつても良い。要は、目的をもって登山するということなのだ。だから、私は、この二つのカテゴリーに該当する者が、その中で射程内の山に登る限りにおいて、そうむやみに世間からひんしゆくをかう事態は起らないと考えるが樂觀にすぎないだろうか。

そして、この論旨から社会人の登山活動に言及するならば、それには根本的な制約がある。言つまでもなく「時間」である。これは立案から始まつて、結果にまでその影響を及ぼす。だが、ここで取り上げるのはあくまでアマチュア登山家である。彼らは、ヒマラヤに、またアルプスに登らなければならないノルマや宿命を背負っている訳ではない。彼らの集団というのは、その根底に彼ら自身の生活がある。世間も彼らに、アイガーやグランド・シヨラスを登つて同じ集団の若者に、またあとに続く少年たちに士気を鼓舞してくれと期待してはいない。はつきり言つて社会は、社会人の登山活動に法外な望みを託している訳ではない。そのことが反つて、有名病に駆られた一部の登山者をおよそアマチュアらしからぬ行為に走らせ、時に心ある人々を驚かせるのかも知れない。だが、社会人の登山活動は所詮プロ登山家のそれではない。

こういう事情を認識して、我々は、山を対象としたサークル活動だと割や切って考えるべきだろう。その中で、各人が目的別に一つの課題をもって登山活動に取り組む。こういう地道な登山活動こそが、社会人としての登山の真髄ではないだろうか。なまじ社会人集団に属しながら、得意気にプロ意識をふりかざし、時に秩序を乱すが如き

言動は、厳に戒めねばならない。世間が我々を評価する基準を認識したうえで、目的をもって山に登り、その過程で何物かを習熟し、体得する。こういう方向こそアマチュア登山家の目指すものであり、我々の活動もそうした方面に目を向けたと思う。